

自由の形態

自由はその形態をもつ。現行の諸制度に対する攻撃がたとえいかに個性的、個人的、あるいはダダ風であろうとも、解放の革命は常に、いかなる社会形態が現存する社会形態に取って代るだろうか、という問題を提出する。何らかの点で、革命的な人々は、それがそこから生活の手段を獲得するところの土地や工場をそれがいかに管理するだろうか、ということを取り扱わねばならない。それは、それが全体としての共同体に影響するところの決定にそれで到達するだろう方法を取り扱わねばならない。このように、もし革命的思想が全く真剣にとりあげられるべきであるならば、それは社会管理の問題とその形態に直接語りかけねばならない。それは解放的社会形態の創造的發展を包含する問題を大衆討論に開放しておかねばならない。経験に取って代り得るところの自由の理論は何もないけれども、いかなる社会形態が個人的自由、社会的自由の最大の実現と矛盾しないか、を示すのに十分な歴史的経験が、またその複雑な問題の十分な理論的公式がある。

いかなる社会形態が現存するものにと取って代るだろうか、ということは、いかなる関係を自由な人々が彼等の間に確立しようと決定するかに依存している。あらゆる個人的関係は社会的次元をもつ——あらゆる社会関係はそれに対して深い個人的側面をもつ。普通一般には、これら二つの側面とその相互関係は神秘的にされ、明確に見きわめることは困難である。位階制社会によって創られた諸制度、特に国家諸制度は、社会関係がそれ自身の世界内に、つまり特殊化した政治的あるいは官僚的区画内に存在する、という幻想をつくり出す。現実には、明確に「非個人的な」政治的、あるいは社会的次元というものは存在しない。過去及び現在のあらゆる社会諸制度は日々の生活、特に、生存のために必要である日々の生活の諸側面——生活手段の生産と分配、若者の育成、生命の維持と再生産等——における人々の間の関係に依存している。人間の解放——何らかの曖昧な「歴史的」、道德的、あるいは哲学的意味においてではなく、日々の生活のこまごました事柄における人間の解放——は深い社会的活動

であり、個人間の関係の諸様式としての社会形態の問題を提起する。社会と個人の間の関係は我々の時代では特別の強調を要する、なぜなら以前には個人関係がこれほど非個人的になり、社会関係がこれほど非社会的になったことはけつしてなかった。ブルジョア社会が、人々から彼等の人間的内容を奪い去り、彼等を物として処理することによって、人々の間のあらゆる関係を最高度の抽象にした。物—商品—は以前には共同体に属していた役割を引受ける。交換関係(多くの場合、貨幣関係として実現された)は人間関係のほばあらゆる他の様式に取って代る。この点では、ブルジョア商品システムはその中で人間関係が直接的、あるいは顔と顔のものであるよりもむしろ媒介されたものであるところのあらゆる社会、つまり資本主義は勿論、前資本主義の社会の歴史的絶頂になる。

社会関係の媒介

一層明確な展望のもとにこの発展を置くために、簡単に過去を回顧し、社会関係の媒介が何を意味するようになってきたかを確定してみよう。

人々の間に立ちふさがった最古の社会的「専門家」—人々の関係を終身的に媒介した僧と種族首長—は位階制と搾取の公的な諸条件を確立した。これらの公的諸条件は工業技術の進歩—少数の人々に多数の人々の犠牲で生じるのにやと十分な物質的余剰を提供する進歩—によって強化され、深化された。共同体のあらゆるメンバーがそこで彼等の共通の諸事を決定し、直接管理した種族集会は解消して首領の役目となり、共同体は解消して社会諸階級になった。

ろう。今は、労働者評議会のほとんどの唱導者達が人々を労働者であれ非労働者であれ、主に経済的実在と看なす傾向がある、と言うだけで十分である。この考えは自己の片面を完全にそのままにしている。人間は分岐された存在、つまり人間を人間から分ち、各人を彼自身から分つところの社会発展の産物として看なされる。

(注) 労働者階級の神話の議論については、「マルクス主義者よ、聞け!」を参照されたい。

かつまたこの片面的観点は生産の労働者管理や過労働時間の短縮の要求によって完全には修正されない。なぜなら、これらの要求は労働過程の性質や労働者の余暇時間の質には完全に手を触れないままであるからである。もし労働者評議会や生産の労働者管理が、労働を愉快な活動に、余暇時間をすばらしい経験に、そして仕事場を共同体に転換しないならば、その時、それらは単に公的構造、事実上は階級構造にとどまる。それらはブルジョア社会状態の産物としてのプロレタリアートの限界を永続化する。本当に、労働者評議会を要求するいかなる運動も、もしそれが仕事場の環境における一掃的転換を進めようとしなければ、革命的とは看なされ得ない。

最後に、評議会組織は顔と顔の関係よりもむしろ媒介された形態の関係である。もしこれらの媒介された関係が直接的関係によって制限され、政治的決定を後者に、単なる行政的管理を前者に与えるのでなければ、評議会は権力の集中点になる。本当に、もし評議会が最終的に大衆集会によって同化され、そして工場が新しい型の共同体に統合されないならば、評議会と工場は伴に人間と人間の間、

一握りの人間に、また一人の人間にさえも社会統御力が益々多く賦与されたにもかかわらず、前資本主義社会の人間は他の人々の関係を媒介した、という事実—評議会が集会に取って代り、首領の地位が評議会に取って代った—は残る。他方ブルジョア社会では、人間による社会関係の媒介は物による、つまり商品による社会関係の媒介に取って代られた。社会的媒介が最高度の非個性的なものになったので、商品社会は我々の注意をそのようなものとして媒介に向けさせる—それは間接代表に、少数の人間による公共事業の管理に、「選挙」、「立法」、「行政」等のような概念や現実の明確な存在に基づいた社会組織のあらゆる形態を疑問視させる。

この社会的再焦点集中のもつとも衝撃的な証拠は、種族生活と共同体のために益々多数のアメリカの青年によってほとんど直観的に叫ばれた要求である。これらの要求は、それらが自由の前位階制形態に、一時的に、戻るといふ意味でのみ「退行的」である。それらは、それらが自由の非位階制形態に構造的に、戻るといふ意味では極めて進歩的である。

対照的に、組織の評議会形態への伝統的な革命的要求(ハンナ・アレントが「革命的遺産」として述べているところのもの)は、位階制社会の領域を完全には破壊しない。労働者評議会は階級評議会として生れる。もし人が、労働者は位階制社会を倒す革命的行動に労働者としての、彼等の利益によって駆られる、ということを決意しないならば(私がきつぱりと否定する仮定)、その時、これらの評議会は階級社会を破壊するのと同じ程度多く階級社会を永続化するのに利用され得る。事実、我々は、評議会形態は位階制の発展に有利である多くの構造的限界を包含する、ということを知るだ

及び人間と仕事の間の疎外を永続化する。基本的に、社会における自由の程度は、その内に人々を統合する関係の種類によって測られ得る。もしこれらの関係が開放的で、疎外されていないで、そして創造的であるならば、社会は自由であるだろう。もし抑圧、あるいは媒介のどちらによっても、開放的關係を禁ずる社会構造が存在するならば、その時、自由は、たとえ生産の労働者管理があろうとなかろうと、存在しないだろう。なぜなら、労働者が管理するだろうすべては生産—生活の条件ではなく、生活の前提条件—であろうからである。社会組織のいかなる様式も、それが組織されている社会条件から遊離され得ない。評議会も集会も伴に革命の利益は勿論、位階制社会の利益も助成してきた。自由の形態が単に形態として取り扱われ得る、と考えることは、法律概念が単に法学の問題として取り扱われ得る、と考えることと同様ばかげたことであろう。自由の形態と内容は、法律と社会のように、相互決定的である。ついでに述べれば、自由の目標に進む組織形態があり、また自由の目標を損う組織形態もあり、そして社会条件は時には一つの形態に、時には他の形態に有利に働く。程度の差こそあれ、これらの形態はそれらを利用する個人を改造するし、あるいは個人の更なる発展を禁じもする。

この章はブルジョア経済を収用する革命的手段としての労働者評議会—一層適当な表現としては、工場委員会—の要求を反駁するものではない。それとは反対に、経験は、工場委員会が経済的管理の初発形態として極めて重要である、ということを繰返し示してきた。しかしいかなる革命も評議会や委員会をその最終的、あるいはその典型でさえある社会組織の様式として設定し得ないし、また「

生産の労働者管理」以上の何らかのものが経済的管理の最終様式として考えられ得る。これら二つの関係の両方とも、労働、余暇、必要、全体としての社会の構造等を革命化するのに十分広くはない。この章では、私は評議会形態や委員会形態の革命的側面を当然の事と思っている。私の目的は、革命プロジェクトを損うところのそれらの内に存る保守的特性を調べることである。

過去百年間の言わゆる「プロレタリア」革命における社会制度のモデルを追求することは、常に流行してきたことである。一八七一年のパリコミューン、一九〇五年と一九一七年のロシアのソヴィエト、一九三〇年代のスペインの革命的サンディカ、そして一九五六年のハンガリアの評議会等は、すべて未来の社会組織の例を求めてすみからすみまで引っかけ回されてきた。尋ねる価値のあることだが、これらの組織モデルは何を共通に持っているか。答えが媒介された形態としての限界以上のものであることはまずない。スペインが、我々が後に見るように、歓迎すべき例外を与える。他のものは、神話の材料以上のものを我々に与えるにはあまりにも短命であったか、簡単に歪曲されたかのどちらかであった。

パリコミューンは多くの異った理由で「リビドーの解放」というその陶酔感、そのラディカルな大衆主義、抑圧物へのその深い革命的衝撃、あるいは敗北におけるその反抗的ヒロイズム等の理由で「尊敬される。しかしコミューンそれ自身は、構造的実在として観れば、大衆的市会程度のものであった。他のこのような組織体に比べて一層民主的であり、一層（古代ローマのように）平民的であつたけれども、市民はそれでもなお、議会の基本線にそって構成されていた。

それは地理的構成に従ってグループ化された「市民」によって選挙された。立法と行政を結合させたために、コミューンは今日の合衆国における市の組織体以上にはめつたに進歩していなかった。

幸運にも、革命的なパリの人々は、コミューンが設置された後、大部分それを無視した。暴動、市の事業の実際管理、そして最後にヴェルサイユとの戦闘等は、主に大衆クラブ、近隣の自警団、そして国民軍の大軍等によって遂行された。パリコミューン（市議会）は残存したけれども、それがこれらのばらばらに形成された街頭や国民軍の形成との矛盾を避けていた、ということとは極めて疑わしい。実際に、暴動の約六週間後、四月の終りまでには、コミューンは「全権的」公安委員会、つまり一世紀前のフランス大革命の右翼のみならず、左翼さえも鎮圧したジャコバン独裁と恐怖政治の記憶のぶん／＼する組織体を設置した。ともかく、歴史はコミューンをたつた三週間存命させただけであつた。しかもその内の二週間はティエール及びヴェルサイユとのバリケード戦という死の苦闘に費された。

パリコミューンから、それがけつして背負わなかつた「歴史的」重荷を取ることは、パリコミューンをけなすものではない。コミューンは街頭のフェスティバルであつたし、そのパルチザンは主に職人であり、浮浪知識人であり、前資本主義時代の社会脱落者であり、そしてルンペンであつた。これらの階層を「プロレタリア」と看なすことは、言語を馬鹿／＼しいまでカリカチュアするものである。産業プロレタリアはコミューン派の少数であつた。

（注）もし我々がコミューン派の大部分を「プロレタリア」と看な

したり、（フランスの情況主義者がしていることだが）単に、それがその生活の諸条件を支配するいかなる統御も持たないが故に、何らかの社会階層を「プロレタリア」と述べるならば、我々は同様に奴隷、農奴、農民、そして中間階級の大部分を「プロレタリア」と呼んでも良いことになる。「プロレタリア」とブルジョアとの間にこのような一掃的対照を設定することは、しかしながら、これらの階級を特殊な、歴史的に限定された階級として性格づけるところのあらゆる決定を消滅させる。この社会分析への目もくらまんばかりのアプローチは、産業プロレタリアートとブルジョワジーから、マルクスが発見した、と自身信じた歴史的に特異なあらゆる特徴（けつして誤りではないけれども、適当ではないと証明された理論的プロジェクト）を奪う。それはマルクス主義の厳しい批判という責務と国家資本主義に向う「自由競争」資本主義の発展からする滑り去る、がそれでもマルクス主義のプロジェクトとの連続性を保持しようとしている。

コミューンはフランスのサン＝キュロット、つまりフランス大革命の後一世紀間パリになかなか消え去らなかつた一階級、の最後の偉大な反乱であつた。窮極的には、この高度に混合した階層はヴェルサイユの銃によつてではなく、産業主義の発展によつて破壊された。

一八七一年のパリコミューンは、ほとんど革命的不安動揺の諸条件下で市の行政管理を調整するために確立された市会であつた。一九〇五年のロシア・ソヴィエトは、ほとんど、セントペテルスブルグにおける暴動に近い諸ストライキを調整するために確立された闘

争組織であつた。これらの評議会はほぼ完全に工場と労働組合に基礎を置いていた。各五〇〇人の労働者毎（各工場や商店が少数の労働者しか含まない所では、それらは投票目的のために集められ、グループ化された）に一人の代表者がいた。なおその外に、労働組合や政党を構成する代表者達がいた。ソヴィエトの様式の組織はそれをもっとも明確な、安定した形態をセントペテルスブルグに持った。そしてそこでは、ソヴィエトは最高時には約四〇〇〇人の代表者を含み、新しく組織された専門職組合の被選出者を含んでいた。セントペテルスブルグ・ソヴィエトは一つの大きなストライキ委員会からすべての被抑圧階級の議会に急速に発展し、その代議制度、要求、責務等を拡げた。代表者はセントペテルスブルグ以外の都市からも許可され、政治的要求は経済的要求に勝り始め、農民組織及びソヴィエトの討議に加わることを許可された彼等の代表者達との連合が確立された。セントペテルスブルグに鼓舞されて、ソヴィエトはロシアの主要なすべての都市や町に広がり、独裁政府のあらゆる統治制度に對置された初期の革命的権力に発展した。

セントペテルスブルグ・ソヴィエトは二カ月以上続かなかつた。そのメンバーのほとんどは一九〇五年十二月に逮捕された。大部分までソヴィエトはセントペテルスブルグのプロレタリアートによつて見捨てられた。そしてプロレタリアートはけつして武装暴動に立ちあがらなかつたし、彼等のストライキは、仕事が晩秋に再開されるに従つて、規模と戦闘性において減少した。皮肉にも、ソヴィエトの初期の戦闘性を越えて進んだ最後の階層はモスコの学生であつた、そして彼等は十二月二日に暴動に立ちあがり、すばらしく計画された都市ゲリラ戦の五日間に、警察力と軍事力をほぼ不能に

まで減減させた。学生は市の労働者から極めて僅かの助力しか受けなかった。街頭戦は、もしその市へ運転されている二、三の鉄道線の中の一つで、ツアーの警備兵が鉄道労働者によってモスコに輸送されていなかったならば、大量の労働者の無関心にさえかわらずとも、無期限に続いていたかも知れなかった。

一九一七年のソヴィエトは一九〇五年のソヴィエトの真の後継物であり、これら二つを相互に区別することは、いくらかの著述家がそうしているが、偽りのものである。十二年前の先在物と同様、一九一七年のソヴィエトは大部分工場、労働組合、そして党組織に基礎を置いていた、がしかしそれらのソヴィエトは拡大されて軍隊諸グループからの代表者達とかなりの数の浮浪のラディカルな知識人を包含していた。一九一七年のソヴィエトは「ソヴィエト主義」のあらゆる限界を露呈した。ソヴィエトは地方的戦闘組織としては極めて貴重なものであったにもかかわらず、それらソヴィエトの国家的会議は益々非代表的組織体であることが証明された。諸会議は非常に位階制の基本軸にそって組織された。都市、町、農村等における地方の諸ソヴィエトは代表者を地区組織体及び地域組織体に選挙した。これらは代表者を実際に活動する国家的規模の会議に選挙した。より大きな都市では、会議への代表制は間接的であることが少なかつた、がしかしそれはそれでもやはり間接的であつた——大都市の選挙人から市ソヴィエトへ、そして市ソヴィエトから会議へ。どちらの場合でも、会議は一つあるいはそれ以上の代議制レベルによって大量の選挙人から分離された。

ソヴィエト会議は三カ月毎に開会されるように計画された。これは会期と会期の間に長すぎる時間間隔を与えた。一九一七年六月に

える能力がなかった、ということとは、それらの位階制的構造にのみならず、それらの限定された社会的根底にも帰せられるべきである。ソヴィエトがそこから元来のストライキ力を引き出した反乱軍諸大隊は、極度に不安定であり、ツアー軍が最終的に壊滅した後、特にそうであつた。新しく形成された赤軍は新兵を入れ、規律を課せられ、中央集権化され、そしてボルシェヴィキによって堅固に統制された。諸パルチザン隊と海軍を除いて、ソヴィエトの軍組織は市民戦争（国内戦）の全期間政治的には不活発であつた。農村は地方の事情に目を向け、国家的問題には無関心であつた。このことは工場をソヴィエトの最重要な政治的基礎としてそのままにしておいた。ここにおいて我々は革命権力の階級概念における基礎的な矛盾にくわす。プロレタリア社会主義は、権力が排他的に工場に基づけられねばならない、と明確に強調するが故に、中央集権化された、位階制的な政治構造を創り出す。

たとえば大きくその社会的地位が「自己管理」のシステムによつて強化されようと、工場は自律的社会組織ではない。工場が働かし得る社会的統御の量ははつきりと制限されている、なぜならあらゆる工場はその生産活動とそのまきに存在を他の工場や原料源に高度に依存しているから。皮肉にも、ソヴィエトは、主に工場に基づくことによつて、工場をその地方環境から遊離することによつて、権力を共同体や地域から国家に移し変え、事実上は社会の基礎からその頂上に移し変えた。ソヴィエト・システムは、国家的規模の階級基本線にそつて編まれた、媒介された社会関係の念入りに仕上げられた糸のかせから構成されていた。

労働階級の自己管理のシステムが階級組織の様式として成功した

開かれた最初の会議は八〇〇人の代表からなつていた——それ以後の会議はもっと多くさえあり、一〇〇〇人、あるいはそれ以上の代表を数えた。会議の仕事を「促進する」ために、そして三カ月毎の会期と会期の間に機能を連続させるために、会議は執行委員会を選出した、そしてそれは一九一八年には二〇〇人を越えないところで固定され、一九二〇年には最大が三〇〇人まで拡大された。この組織体はほぼ常時会期中であることができた、しかしそれはまた動きの取れにくい組織体であると看なされて、十月革命の後その任務のほとんどが少数人数の人民委員会に振替えられた。第二回ソヴィエト会議（一九一七年十月）の統制力を一度獲得すると、ボルシェヴィキは人民委員会に、後には共産党の政治局に権力を集中することは容易いと見て取つた。ソヴィエト内の反対グループは第二回ソヴィエト会議から去つたか、その後あらゆるソヴィエト機関から放逐されたか、のどちらかであつた。ソヴィエト会議の三カ月毎の開会はいつの間にか墮落を許した。完成したボルシェヴィキ執行委員会と人民委員会は簡単にはソヴィエト会議を召集しなかつた。遂に、ソヴィエト会議は年にたつた一度開会されるだけになった。同様に、地区ソヴィエトや地域ソヴィエトの会議と会議の間隔は、益々長くなり、そして常時会期の組織体としてソヴィエト会議によつて創られたソヴィエト執行委員会の会議でさえも益々まれになり、遂には、年にたつた三回開会されるだけになった。地方の諸ソヴィエトの権力はソヴィエト執行委員会の手中に入り、そのソヴィエト執行委員会の権力は人民委員会の手中に入り、その人民委員会の権力は遂に共産党政治局の手中に入った。

ロシア・ソヴィエトは真の大衆民主主義のために解剖的組織を備

ところの多分唯一の例は、スペインにあり、そしてそこではアナルコ・サンディカリズムがその旗のもとに多数の労働者と農民を引きつけた。スペインのアナルコ・サンディカリズムは中央集権化への傾向を制限しようとして、追求めた。スペインにおける大きなアナナルコ・サンディカリズムの連合であるCNT（労働国民連合）は、地方の組織体と国家的会議に統御として活動する選挙された委員会システムを持った二重組織を創出した。全員集会は代表会議への代表者を解任し、代表会議の決定を撤回する権限を持っていた。CNTの「上級」組織体はあらゆる実質的目的のために調整組織体として機能した。この組織機構の効果性について、いかなる誤りもあつてはならない。それはCNTの各メンバーに重い責任感、連合の活動や政策に直接的、無媒介的、個人的に影響しているという感じ等を与えた。この責務は、CNTを第一次世界大戦と第二次世界大戦の間の数十年間のヨーロッパでの最大の革命運動体としたのは勿論、もっとも戦間的な運動体としたところの高潔性を持つて遂行された。一九三六年のスペイン革命はCNTのシステムを現実の試験にかけた、そしてそれは十分にうまく働いた。バルセロナでは、CNT労働者は工場、運輸設備、公共事業を占拠し、それらをアナナルコ・サンディカリズムの基本線にそつて管理した。バルセロナ市の経済は——ブルジョア共和政府とスペイン共産党によつて実施された組織的なサボタージュにもかかわらず——著しく成功し、目ざましく効果的に働いた、ということとはほとんどあらゆる政治党派の観察者によつて立証された確実な事実として残っている。一九三七年五月、中央政府の警備隊がバルセロナを占領し、それに続いてプロレタリアが蜂起したとき、実験は遂に流血の修羅場の内に壊滅した。

彼等のかなり強い影響力にもかかわらず、スペインのアナキストはかなりの部分の労働者階級と農民層以外には事実上いかなる基礎になる部分も持っていなかった。運動体は主として工業州カタロニア、地中海沿岸地帯、農村州アラゴン、そしてアンダルシア等に限定されていた。その実験を破壊したものは、スペイン内部でのその孤立とそれに対して発動された圧倒的軍事力―ファシストは勿論、共和政府の、ブルジョアは勿論、スターリニストの軍事力―であった。

(注)このことは、多くの「指導的」なスペインのアナキストによっておこなわれた悲惨な政治的誤りを無視することにはならない。指導的アナキストはカタロニアに独裁権を確立するかどうかの選択に直面し、そして彼等は態度決定をする準備がなかった(正しくその通りである)。けれども、このことは終始場当たり主義的な戦略を実行したことといかなる免罪符でもなかった。

一九一八年のドイツ、一九三四年のオーストリア、一九五六年のハンガリー等において生れた評議会様式の組織を詳細に調べるとは、実り薄いことだろう。ドイツ評議会は絶望的に歪曲された。言わゆる「多数派」(改良主義者)の社会民主主義者は新しく形成された評議会を支配し、それら評議会は反革命目的に利用することに成功した。ハンガリーとオーストリアにおいては、評議会は反革命によって急激に破壊された、がしかし、もしそれら評議会がさらに発展していたとしても、それらがロシア、ソヴィエトの二の舞を免れていただろう、ということを感じるいかなる根拠もない。歴史は、

それらは機能を果す方法を非常に首尾よく性質上リバータリアンに発展させたので、もつとも想像力の豊かなユートピアンでさえも、それらが実際に達成したところのものと思索で比肩することに失敗してきた程である。

アテネ人の人民会議は多分ギリシャ種族の初期の集会に根底を有していた。所有と社会階級の発展とともに、それは封建的社会構造に取って代られ、人々の社会的記憶の内にのみなかなか消え去らなかつた。一時、アテネ社会は、ローマが数世紀後にたどつたところの内部崩壊への悲惨な道を計画しつつあるように見えた。土地を大部分抵当に入れた大きな階層の農民、益々多くなる農奴に似た、小作料を作物で支払わされる小作民、大集団の都市人夫や奴隷等は、少数の強力な大地主、成金の商業中間階層等と分極した。紀元前六世紀までに、アテネとアティカ(アテネを囲む農村地域)におけるあらゆる条件は、破壊的な社会戦争に向つて成熟してしまつていた。

アテネの歴史のコースはソロン革新によって逆転された。一連の徹底的な処置によって、農民は経済的に生活可能な条件を維持し、地主は彼等の権力の大部分を奪い取られ、人民会議が復活し、十分に公平の原則に基づいた正義のシステムが確立された。大衆民主主義へ向う傾向は、それが他の地方では全然匹敵するものがなかつた形態を達成するまで、ほぼ一世紀半の間拡大された。ペリクレスの時代までに、アテネ人は、ポリスが古代世界の物質的境界内で合理的の勝利を表わす点にまで、彼等のポリスを完成させた。

構造的には、アテネのポリスの基礎は人民会議であつた。各プリタニイ(年の十の目)の日の出後すぐに、アティカ中からの何千という男の市民が集会の会議のために、アテネの市外すぐ近くにある

ボルシェヴィキが評議会様式の活動を歪曲する唯一の者ではない、ということを示している。アナルコ・サンディカリズムのスペインにおいてさえ、一九三七年までに、CNTの委員会システムは全員集会システムと衝突し始めていた、という証拠がある。たとえばどんなにその結果がなつていたとしても、全体の実験は共産党員と共和政府の警備隊によって終焉させられた。

評議会様式の組織が中央集権化、操作、悪用等に免疫でない、という事実は残る。これらの評議会はなおも特殊な、一面的な、媒介された形態の社会管理である。最良で、それらは非中央集権社会への飛び石(一段階的手段)であり得る―最悪の場合、それらは容易に位階制的形態の社会組織へ統合され得る。

アセンブラー 集会と共同体

無媒介の形態の社会関係への洞察のために全員集会の方に目を向けよう。集会は多分、その機能が首領や評議会によって先取りされるまでは、初期氏族及び種族社会の構造的基礎を形成した。それは古代アテネにおける人民会議として現われた。後に、他と混つた、そしてしばしば歪んだ形態において、それはヨーロッパの中世の町々やルネッサンス期の町々に再現した。最後に、「区」(チウソン)としての集会は、フランス大革命の期間パリにおける反乱組織体として出現した。人民会議とパリ住民の区は最厳密な研究を保証する。両者はそれぞれの時代のもつとも複雑な都市で発展したし、また両者は高度に巧妙化した形態を執つた、そしてしばしば、異つた社会的生れの諸個人をすばらしい、とは言えつかの間の利益共同体に結合した。

丘、ピニクスに集まり始めた。ここ、野外で、彼等は、祈願者の厳肅な詠唱が会議の開会を宣告するまで、友人グループの間で気楽に遊び戯れていた。「神聖」、「世俗」、「外務」の三表題のもとに調整された協議事項が、集会の告示とともに数日前に配布されてしまつていた。人民会議は、協議事項が含まないものは何も追加することも、提案することもできなかったけれども、その主議題は集会の意志で再調整されることができた。個々の市民に影響する提案法令の場合を除いて、いかなる定足数も必要であつた。

人民会議はアテネ社会のあらゆる制度や公職に勝る完全な主権を享受した。それは戦争と平和の問題を決議し、將軍を選出し、解任したり、軍事行動を再調査し、国内及び外交政策を討議、票決し、不平不満を取り除き、行政部門の働きが調査され、可決され、望ましくない市民を罰した。市民組織において六人にほぼ一人の割合の人間が、一定時間共同体の諸務の行政に従事させられた。主としてくじで選ばれたほぼ千五百人は、税金の徴収、海運、食料供給、公共設備等の管理、そして公共建設のための計画の準備等に相当する部門を構成した。アティカの十の種族の各々からの徴募兵によって全部構成された軍隊は、選出された士官によって指導された。アテネは市民の弓兵とスキト人の奴隷によって警備された。

人民会議の協議事項は五百の評議会と呼ばれた組織体によって準備された。評議会が人民会議を超えるいかなる権威も獲得するといけないので、アテネ人はその構成と機能に注意深く制限を加えた。市民の登録簿からくじによって選ばれ、今度は種族によって毎年選挙された評議会は、十の下部委員会に分けられ、そしてそれらの各々は年の十分の一の期間職務を帯びていた。毎日議長が、ポリスに

対して職務遂行中の下部委員会の五〇人のメンバーの間から、くじで選ばれた。二四時間の彼の職務の間、評議会の議長は国璽及び城と公文書保存所への鍵を保管し、国の代理首領として機能を果たした。一度彼が選ばれたならば、彼はその地位を二度と占めることはできなかった。

十種族の各々はアテネの法廷で審判者——我々が陪審員と呼ぶもの——として働く六百人の市民を毎年選出した。毎朝、彼等はテゼウスの寺院にてくつろぎ歩いて行つた、そしてその寺院で、その日の裁判のためにくじが引かれた（『判決された』）。各法廷は少なくとも二百一人の陪審員から構成され、裁判は実際の裁判のいかなる歴史的水準から測つても公平であつた。

全体として取り上げれば、これはすばらしいシステムの社会管理であつた。ほとんど完全にアマチュアによつて動かされたアテネのポリスは、公共政策の公式化と行政を完全な公共の仕事とした。「ここにはいかなる特権階級、いかなる職業的政治家の階級、いかなる官僚制もない。唯一に国家の機密を知り、全共同体の集合した知恵として尊敬され、信頼されたところのローマの元老院のようないかなる人間の組織体もない。」とW・ワード・フォウラーが述べている。続けて彼は述べる「アテネでは、誰かの経験を当てにするいかなる傾向、事実上いかなる必要もなかった。各人は自己の一時的な責務の詳細に知的に立ち入り、我々の語り得る限りの勤勉と誠実をもつてその責務を果たした。」（『ギリシャとローマの都市国家』）この見解は奴隷を必要とし、ポリスにおける婦人のいかなる役割も否定したところの階級社会にとつては誇張されているかも知れないが、フォウラーの説明は、基本的に、正確である、という事実は残る。

美術、文学、哲学、そして国民の才能のあらゆる他の偉大な産物等は、隔離された温室文化の単なる繊細な成長ではない。それらは国民生活の広い共通の土壌に頑強に根付かれ、絶えざる養分をそこに発見しなければならぬ。もし我々が教訓を要求するつもりならば、それが、我々が古代ギリシャから学び得るものである。（『ギリシャ国家』）

アテネでは、大衆集会は大々的な社会変化の最終産物として出現した。パリでは、二千年以上も後に、大衆集会は社会変化それ自体のことで、革命的形態と暴動の力として出現した。一七九〇年代初期のパリ住民の区は、区内の關係が位階制的構造によつて媒介されなかった、という決定的な相違は持っているが、一九〇五年と一九一七年のソヴィエトと同様の戦いの組織としての役割を演じた主権は革命的集会それ自体にあり、それを越えたところにはなかった。

パリ住民の区は（フランス大革命以前の）フランス議會への選挙のために確立された投票システムから直接的に出現した。一七八九年に、王政は首都を六〇の選挙区に分割した、そしてその各々は言わゆる「アクティブ」あるいは納税市民、つまり市の被選挙権のある投票者の集会を形成した。これらの初めの集会は選挙人の組織を選挙することを期せられ、この組織が、今度は、首都の六〇人の代表を選出することができた。選挙機能を遂行した後、集会は消滅することを要求された、がしかしそれらは王政を無視して存在し続け、市の永久的な組織体になった。次第に、それらはあらゆる「アクティブ」な市民の近隣の集会に変わり、各区では形態、規模、力等において相異が生じた。

実際、業績の偉大さは、アテネ人が古典社会と分ち持つところの奴隷制的、家父長制的、階級的諸特徴にもかかわらず、アテネが全体として言語の文字通りの意味で実用的民主主義に発展した、という事実が存在する。同様に意義深く、また多分我々の時代にとって慰めとなることは、この業績は、ポリスが社会崩壊に向う真逆さまのコースを取ろうとしていたとき、達成された、という事実である。その最良の時には、アテネの民主主義は古代社会のより侮辱的な、非人間的な諸特徴を大きく修正した。奴隷の重荷は、奴隷が資本主義的企業に使われた時を除いて、歴史の他の時代に比較して小さかつた。一般的に、奴隷は彼等の所持金を蓄積することを許可された。アテネの自営農民の農場で奴隷は、一般的に彼等の主人と同じ条件下で働き、同じ食料を共にした。アテネでは、奴隷は市民から服装、礼儀、態度物腰等で区別されなかつた——外国からの訪問者による皮肉な評言の源になったもの。多くの手工業で、奴隷は自由人と肩を並べて働いたのみならず、他の奴隷は勿論、自由人労働者に勝るすぐれた地位を占めさえした。

すべてを考慮してみると、人間動産（『奴隷』）の背荷によつてその文明と高潔な人間的な見地を建設したところの奴隷経済としてのアテネのイメージは、誤っている——「その過去の解釈において、未来に関するその独断的ベシミズムにおいて、誤っており、なかならず人間性質のシニカルな評価において故意に誤っている。」とエドワード・ジーマンは述べている。彼は続けて言っている「人間と同様、社会は区画内で生きることができない。社会は、社会が余暇を得ることで厭ひにしたところの生活のためにその余暇の使用で理合せをすることによつて、偉大さを達成することを希望できない。

一七九〇年五月の市の法律は、六〇区を四八区に再組織した。その法律は大衆集会に限定を加える意図で制定された、がしかし諸区は簡単にそれを無視した。それらは基礎を広げ、パリへの統制力を拡大し続けた。一七九二年七月三〇日に、「フランス座」区は「アクティブ」と「パシブ」（非納税者で被選挙権を持たない者）との差別を徹底し、極貧の、遺棄民のサン・キュロットを集会に参加するように召請した。他の諸区は「フランス座」区に続いた、そしてこの時期から諸区は真正の大衆組織——真にフランス大革命のまさにその魂——になった。新しい革命的な「八月十日のコミューン」を建設したのは区であつた、そしてそのコミューンはテュイルリー宮殿への攻撃を組織し、遂にブルボン王政を消滅させた。革命のパリを倒すべく諸地方州を奪起させようとしたジロンド党の努力を防いだのは区であつた。断えざる督励、果しない代表派遣、武装デモ等によつて、革命に一九一一年後、顕著な左への情力を与えたのは区であつた。

しかしながら、区は単なる戦闘組織ではなかつた。それらは自己管理の本物の形態を現わした。それらの発展の高い時点では、それらは市の完全な管理を引継いだ。個々の区は区自体の近隣を警備し、区自体の裁判官を選挙し、食料分配の責任を負い、貧民に公共扶助を与え、国民衛兵の維持に貢献した。一七九二年四月の戦争の布告とともに、区は革命軍のための志願兵を兵籍に入れること、彼等の家族の世話をする、戦争募金を集めること、全大隊に装備を与え、食料を供給すること等の追加された仕事を引き受けた。統制が急騰するインフレを妨ぐために物価と賃銀に対して確立された「極限」の期間、区は政府固定の価格に責任を負つて対処した。パリへ

の食料供給のため、諸区は代表を田舎へ送り、食料を買い、輸送し、公平な価格でそれを分配する手はずをさせた。

この極度に重要な諸活動の複合が、職業的官僚によってではなく、その大部分は普通の小売商人や職人によって引き受けられた、ということとは銘記されるべきである。大量の区の責務は労働時間を終えてから、区のメンバーの自由時間の間に果たされた。区の大衆集会は普通、夕方に近隣の教会で開会された。集会は通常近隣のあらゆる成人に開放されていた。非常事態の時期には、集会の会議は毎日開かれた。特別会議は五〇人のメンバーの要求で召集されることができた。ほとんどの管理的責務は委員会によって果たされた。がしかし大衆集会は区のあらゆる政策を確立し、委員会の仕事を精査し、可決した、また集会の意志で役員を更迭した。

四八区は「パリコミューン」、つまり首都の市会を通して調整された。非常事態が起ったとき、諸区はしばしば相互に直接、特別代表を通して協働した。下からの協働のこの形態は決して永久的な関係に具体化しなかった。フランス大革命の「パリコミューン」は決して威圧的な、硬直化した制度にはならなかった。それはほとんどあらゆる重要な政治的非常事態と伴に変化した、またその安定性、形態、機能等は大部分区の要請に依存していた。例えば、一七九二年八月十日の蜂起に先立つ日々、区は簡単に旧市会を一時中止し、パリの市長ベチオンを監禁した、そして反乱委員という人々で、コミューンの全権威と国民衛兵の指揮権を引き継いだ。ほぼ同じ手続きが、コミューンとパリの市長バシェがラジカルな諸区の蜂起に（説得力のある幾らかの「ゼスチュア」の後）承諾を与えた、という相異はあるにしても、九カ月後に続いて取られた、そしてその時、

ジロンド党が国民公会から追放された。

国民公会への支配を堅固にするために区に頼った後、ジャコバン党は区を破壊するために国民公会に頼り始めた。一七九三年九月には、国民公会は区の集会を一週間に二回にまで制限した。三カ月後、区は治安判事を選挙する権利をはく奪され、救援の仕事を組織する役割を奪われた。一七九三年と一七九四年四月の間にジャコバン党がおこなったフランスの大々的な中央集権化は、区の破壊を完全にした。区は警察への統制力を否定され、また区の管理責務は有給の官僚の手中に置かれた。一七九四年までに、区の生命力は完全に吸い取られてしまった。それはミッシェルが次のように述べている通りである。「区の大衆集会は死んだ。そして区の権力は区の革命委員会に移行した。そしてその委員会は、それ自体もはや選挙された組織体ではなくて、当局によって任命された単なる役人のグループであったが、自体もまた多くの生命力を持っていなかった。」区は、それらが国民公会における権力に任命したところのまさにその革命指導部によって滅された。ロベスピエール、サン・ジュスト、ルバ等が国民公会を倒すべく区に訴える時がきたとき、多数の区は事実上彼等のために何もしなかった。実際、革命的なグラヴィール区——非常に熱心にジャック・ルーと一七九三年の過激派を支持した人——は、テルミドル派の任務に復讐的に手をかし、ロベスピエール主義者数カ月前にルーを自殺に追いやり、左翼のスポークスマン達をギロチンにかけたジャコバンの指導者達——を倒すべく進軍した。

（注）マルクスは、フランスを「中央集権化すること」についてジ

ャコバンを絶讃した、また有名な「中央委員会の建言」（一八五〇年）において、ドイツに対する彼の戦略をジャコバンの政策に基づいてモデル化した、ということは注目されてもよい。これは信じ難い程の短見であった——また革命行動における人民の自己活動と自己改造に対する深い無感覚を現わしているところのお規りの強調であった。

「此岸」から「彼岸」へ

古代アテネと革命のパリの集会を掘りくずした諸要因は、ほんの僅かの議論しか要しない。両方の場合、集会様式の組織は外部からのみならず、内部からも——階級対立の発展によって——壊された。たとえいかに賢明に企てられたとしても、所与の社会の内容を克服し得るいかなる形態もない。かような階級対立を克服するための物質的資源、工業技術、経済発展の水準等を欠如していたけれども、アテネとパリはただ一時的に、そして完全な社会の崩壊というより深刻な脅威に対処するためにのみ、近似的な自由の形態を達成できた。アテネは、主に、ポリスが種族的形態の組織と生きた接触をなおも保持していたが故に、数世紀間人民会議を持続した。他方、大部分サン＝キュロットが幸運な周囲の諸条件のまれな組合せによって、革命の前面に絶壁のごとく押し出されてしまったが故に、パリは数年間、区様式の組織を発展させた。人民会議も区も共に、それらが抑制しようと企図したが、しかし消滅させる能力のなかったところのまさにその諸条件——所有、階級対立、そして搾取——によって基礎を掘りくずされた。それらが直面した莫大の問題、それらが克服し

なければならなかった手におえそうもない障害物を考慮するならば、それらに関して顕著なことは、それらが断然働いた、ということである。

アテネとパリは大都市であり、農村ではない、ということは銘記されるべきである。実際、それらはそれぞれの時代の水準からすると、複雑な、高度に巧妙に計画された都市中心地であった。アテネは二五万人以上の人口を、パリは七〇万人を越す人口をそれぞれ維持していた。両市は共に、世界規模の貿易を行っていた。両市は共に、複雑な兵站的業務の問題という重荷を負っていた。両市は共に十分に丹念に作られたシステムの公共統治によってのみ満足させられ得るところの多種多様の必要事を持っていた。各々は今日のニューヨークやロンドンの人口のほんの一部を持っていたのだが、この点でのそれらの有利さはそれらの極度に未熟なシステムのコミユニケーション、輸送等によって、そして少なくともパリにおいては、集会のメンバー達が一日の大部分を野蠻な骨折り仕事にさかねばならない必要によって、その有利な点以上に棒引きにされていた。それでもパリは、アテネにおとらず、アマチュアによって管理された——数年間、しかも仕事のあい間に革命のつばの中での市の管理を取り計った人々によって。それによって革命を起し、その征服を組織し、そして遂に国内の反革命と外国の侵略に対してそれを守ったところの原理的手段は、近隣の大衆集会であった。彼等が創出したこれらの集会や委員会が非効果的であったとか、技術的に無能であったとかい証拠は何もない。反対に、それらは、いかなる専門的官僚制もとえいかにラジカルな外見を持とうとも、未だかつて達成することを望み得なかったところの大衆イニシアティブ、行動の決

然性、革命の目的感等を覚醒した。実際、アテネは西洋哲学、数学、ドラマ、史料編纂、芸術等の基礎を創出し、また革命のバリエーションに劣らず当時の文化と西洋世界の政治思想に貢献した、ということも強調される価値がある。これらの業績の活動舞台は官僚的諸機構の周囲に構成された伝統的国家ではなく、無媒介の關係のシステムつまり大衆集会へ組織される顔と顔のデモクラシーである。

区は我々に大都市で、そして中央集権的政治国家から可能的に非中央集権化された社会への革命的過渡期間における集会組織の大きなモデルを提供する。人民会議は我々に一つの非中央集権的社会における集会組織の大きなモデルを提供する。「モデル」という語は慎重に用いられる。人民会議と区は生きた経験であり、理論的なヴィジョンではなかった。しかし厳密にこのことの故に、それらは「空想的」や「非現実的」としてしばしば放逐されてきたところの多くのアナキイな理論的考察を現実に有効にした。

所有社会、階級支配、中央集権、そして国家等を崩壊するという目標は、所有、階級、そして国家等の歴史的出現と同様に古いものである。初めには、反逆者達は氏族、種族、そして連邦等を回顧してきた。過去がなおも、未来よりも一層身近に密接している時代であった。それから、過去は人間のヴィジョンと記憶から完全に遠くへ去った、がしかし多分「黄金時代」あるいは「エデンの園」の消え去らぬ夢としては例外であった。この時点で、解放のまさにその概念は思索的に、理論的になった、そしてあらゆる厳密に理論的なヴィジョンと同様に、その内容は現存の社会的材料によって充満された。それ故、ユートピアは、モアからベラミイまで仮説的未来のイメージではなく、理性の論理的結論——あるいは不合理——に引き寄せ

我々は、ほぼあらゆる主要な革命的大変動が自然発生的に始まった、という歴史的事実で始める。一七八九年七月のバスチューの引き継ぎに先立つ「無秩序」の三日間、一八七一年のバリコムーに導いたところのモンマルトルにおける大砲の防衛、ペトログラードにおける一九一七年二月の有名な「五日間」、一九三六年七月のバルセロナの蜂起、一九五六年のブダペストの引き継ぎとロシア軍の駆逐等が証拠となっている。ほとんどあらゆる偉大な革命は下から、「大衆」の分子運動、つまり「大衆」の漸進的個体化と「大衆」の爆発から——たえず権威的「革命家」を完全に驚愕させたところの爆発から——生じてきた

(注) 実際、ここでは「歴史」は何か我々に教えるものを持っていない——これらの自然発生的蜂起が歴史ではなく、同じ現象——革命の種類の顯示である、という正確な理由で。自身を革命家と呼び、これらの出来事を自分自身の言葉で十分に、理論的先入見なしに研究しないものは誰でも、革命ごっこをするディレッタントである。

革命目標からの革命プロセスのいかなる分離もあるべきではない。自己管理に基づく社会は自己管理の方法によって達成されねばならない。これは自己の鍛造（そう、革命プロセスにおける文字通りの鍛造）と自己が所有し得る管理の様式を示している。もし我々が「権力」を人間を支配する人間の権力と定義するならば、権力は、人が自身の生活を支配する権力を獲得し、そして自身を「発見」するのみならず、もつと意味深いことには、あらゆる社会的次元で彼の自我を公式化するとそのまさにそのプロセスによってのみ破壊され

られる現在のイメージである、ということが事実になる。ユートピアは奴隷、王、王子、寡頭政治の少数の独裁者、技術官僚、エリート、郊外居住者、実質的なプッチブル等を持つ。左翼においてさえも、無所有の、無国家の社会という目標を、その内で目的が国家の使用によって達成されるところの諸段階の一連の近似と定義することが習慣となった。媒介された権力が未来のヴィジョンに入った。より悪いことには、ロシアの発展が示すように、それは、今日国家が特別な階級の単なる「執行委員会」ではなく、人間の条件になる点にまで強化された。

(注) バコーヘンとモーガンの仕事で、人類がそのコミュニケーションの過去を再発見したのは、一八六〇年代になってからであった。そのうちに、発見はブルジョア的家族制と所有制に対して向けられた純粹に批判的な武器となつてしまった

現存する社会の完全な分解消滅をヴィジョン化するに際して、我々は権力の問題から逃げるわけにはいかない——我々自身の生活を支配する権力、つまり「権力の強奪」かそれとも権力の分解消滅かの問題を逃げるわけにはいかない。現在から未来へ、「此岸」から「彼岸」へ行くに際して、我々は尋ねねばならない。権力とは何か。いかなる条件下で、それは分解消滅されるか。その分解消滅は何を意味するか。自由の形態、つまり社会生活の無媒介の關係はいかにして階層化した社会、つまりその内において非自由の状態が不条理という点にまで——支配のための支配にまで——運びきたらせられた社会から出現するか。

得る。

(注) ウィルヘルム・ライヒと後にハーバート・マルクーゼが明確にしたことは、「自我」が個人的次元のみならず、社会的次元でもある、ということである。集会や共同体に表現を見出すところの自己は、本当に、自己表現——形態と内容の完全な一致——を見出したところの集会や共同体である。

自由は、そのように考えられれば、「革命」——ましてや権威と権力の装飾によって催眠術にかけられた社会的俗物によって達成されたような革命——の「最終産物」として個人に「引き渡される」ことはできない。集会と共同体は立法手続きによって、あるいは布告によって存在させられることはできない。確かに、革命グループは、これらの諸形態の創造を促進しようと目的的に、意識的に追求することができ。しかし、もし集会や共同体が有機的に出現することが許されないならば、もしそれらの成長が活動中の社会的諸プロセスによって刺激され、発展させられ、成熟させられないならば、それらは真に大衆的な形態になることはないだろう。集会と共同体は革命プロセスそれ自体の内部から生じなければならぬ。実際、革命プロセスは集会と共同体の形成、そしてそれを伴いながらの権力の破壊であらねばならない。集会と共同体は「戦闘的な言葉」にならねばならず、よそよそしい万能薬になつてはならない。それらは現存する社会に対する斗争の様式として創造されねばならず、理論的な、あるいはプログラムの抽象として創造されてはならない。この点はいくら十分に強く力説してもたりない程である。街区、

近隣あるいは区における人民の未来の集会——来るべき革命的区——は、もつとも鳴り響く「革命的」称号によって飾られたあらゆる現代の委員会、シンジケート、党、そしてクラブ等よりも一層高い社会的レベルに立つだろう。それらはブルジョア社会という腐敗して行く組織体内でユートピアの生きた核となるだろう。講堂で、劇場で、中庭で、公会堂で、公園で——そしてそれらの先覚者、つまり一七九三年の区のように——教会で、会合が持たれ、それらは非大衆化の活動舞台となるだろう、なぜなら、革命プロセスのまさにそのエッセンスは個人として活動する人民であるから。

この時点で、集会はブルジョア国家の権力——「二重権力」の有名な問題——と直面するのみならず、発端的国家の危険にも直面する。

パリの区のように、それは国会に対してのみならず、媒介された社会形態を創出しようとする傾向に対しても斗かわねばならない。^(注)産業を引き継ぐだろう形態にほぼ確実になるだろう工場委員会は、工場内の労働者集会によって直接統治されねばならない。なお、近隣委員会、評議会、部門等は近隣集会に完全に根付いていなければならない。それらはあらゆる点で集会に回答可能でなければならない。そして、それらとそれらの仕事は、集会による絶えざる監視の下になければならない。最後に、それらのメンバーは集会による直接リコールに従わねばならない。社会の比重は、要するに、その基礎——永続的集会における武装した人民——に移し変えられねばならない。

(注) 観念を流布することに伴い、アナキストの最重要な仕事は、理論的、組織的斗争を権威主義者と連続的に交わらせることによって大衆運動の自然発生性を防衛することであるだろう。

集会の活動舞台が現代ブルジョア都市である限り、革命は手に負えそうにない環境に直面する。ブルジョア都市は、そのまさに性質と構造によって、中央集権化、マスメディア、操作等を助成する。非有機的な、巨大な、工場のように組織された都市は、有機的な、多面的な共同体の発展を禁じる傾向がある。普遍的な溶媒としてのその役割で、集会は都市それ自体を溶解すべく努めなければならない。

我々は、彼等が人類を更新するのとちょうど同様に、社会生活を更新している若者を心に描くことができる。都市を去って、彼等は、年長の人々も益々多く寄り集りつつあるところの核的生態共同体の基礎を創り始めた。大きな資源の貯蔵は彼等の使用のために動員される。注意深い生態的測量や思いつきはもつとも有能な、想像力に豊かな人々によって有効に自由に処理される。現代の都市はしなび、縮小し、消滅し始めている。それは古代の先在都市が古昔に行なったことと同じことである。新しい、多面的な生態共同体において、集会は真正の環境と避難所を発見する。形態と内容は今や完全に一致する。「此岸」から「彼岸」への、区から人民会議への、都市から共同体への旅は、完成される。工場はもはや特殊化された部分ではない。それは今や共同体の有機的な一部になる。この意味で、それはもはや工場ではない。共同体への工場の解消は、所有社会、階級社会、そして何にも増して媒介された社会等の最後の形跡の新しいポリスへの解消を完成する。そして今や人間生活の真のドラマがあらゆるその美しさ、調和、創造性、喜び等において花開くことができる。

ニユーヨーク

一九六八年一月